

# **“~tekara” and “~maeni”**

## **Implying a Temporal Sequence**

**Yukiko Muramatsu**

The purpose of this paper is to make clear the different use of “ $S_1$  tekara  $S_2$ ” and “ $S_2$  maeni  $S_1$ ” in Japanese. Although “ $S_1$  tekara  $S_2$ ” is similar to “ $S_2$  maeni  $S_1$ ” in that they imply a temporal sequence, there are some cases where we can use only one expression in the actual situation. In this paper, I show that “ $S_1$  tekara  $S_2$ ” is different from “ $S_2$  maeni  $S_1$ ” in the following points.

- 1) The expression “ $S_1$  tekara  $S_2$ ” requires that  $S_2$  should occur for a certainty, but the expression “ $S_2$  maeni  $S_1$ ” is used whether  $S_2$  actually occurs or not if we can expect that  $S_2$  will certainly occur.
- 2) When “ta”form is used at the end of the sentence, both  $S_1$  and  $S_2$  of “~tekara” have already occurred, but it is possible that  $S_2$  of “~maeni” has not occurred yet.

# 順序を表す「～てから」と「～まえに」

村松由起子

## 1. はじめに

二つ以上の出来事・事態の時間的な順序関係を述べる際には、「～て」「～てから」「～たあと」「～まえに」といった複数の選択肢のなかから、一つの形式を選んで用いている。どの形式を用いるかは、出来事・事態の順序関係が自然発生的に生じるのか、それとも意図的に関係づけられるのかなどの条件によると考えられている。出来事・事態のあとさきの関係には、順序の他にも、原因結果、契機、以来などがあり、上記の形式の用法も、従来、これらの言葉を用いて説明されてきた。例えば、「～てから」は、直後、順序、契機、以来といった言葉によって説明されてきた<sup>1)</sup>が、それでは、順序とは何か、また、他の形式は順序を表さないのか、という視点から考えてみると、(1) (2) のように「～て」「～まえに」の形式で順序を表している場合もあり、改めてこれらの違いは何かという疑問が生じてくる。

- (1) a 薬を飲んで寝る。  
b 薬を飲んでから寝る。  
c 寝るまえに薬を飲む。
- (2) a 皮をむいて食べる。  
b 皮をむいてから食べる。  
c 食べるまえに皮をむく。

先行研究の多くは、「～たあと」と「～てから」、「～まえに」と「～ないうちに」の組合せで、それぞれ個別に比較し、その意味・用法の違いを考察しているが、このような考察方法では、「～て」「～てから」「～まえに」を直接比較することはないので、その違いを明らかにすることはできない。(1) (2) の a b c のように、これらの形式は順序を表すことができるという点で共通しているため、「～てから」の用法を説明するのに、単に「順序」という言葉を使っただけでは不十分であろう。

この三つの形式のうち、「～て」については、すでに詳しい研究がなされている<sup>2)</sup>ので、本稿では、「～てから」と「～まえに」について扱うことにする。まず、順序とはどのような関係かを考えた上で、「～てから」「～まえに」について、先行研究の成果を踏まえながら、順序を表す際の用法上の

違いを考察していく。

## 2. 順 序

『新明解国語辞典』第四版で「順序」を調べてみると、「何の次に何が・あるか（行なわれるか）という、あとさきの関係」とあった。この説明に基づくと、次の(3)(4)はいずれもあとさきの関係があるので、「順序」を表していると考えられる。

(3) 完全に溶け合った砂糖と漉し餡を見とどけてから、火を入れます。(川端道喜『和菓子の京都』)

(4) 他人に注意する前に自分が何をしているのか考えるべきです。(中日新聞)

このように、「～てから」だけでなく「～まえに」を用いても順序を表すことができるのは確かである。また、一言で「順序」といっても、あとさきの関係を生じさせている要因は様々であり、(3)のようにある行為を達成するための行程としてあとさきが決まっている場合もあれば、(4)のように意図的に関係づけられる場合もある。さらには、「雨がやんで虹が出た」のように、あとさきが必然的に決まっている場合も考えられる。

では、逆に、「順序」ではない時間的前後関係があるのだろうか。次の(5)では先行事態が生じた時点では後行事態<sup>3)</sup>の発生は予測されておらず、あとさきの関係は決まっていなが、後行事態が起こった時点で二つの事態間には時間的前後関係が生じている。

(5) 家を出てから忘れ物に気づいた。

このような場合は、「順序」ではなく、二つの事態はそれぞれ単独に生起し、それを時間軸上に並べた場合の前後関係を表していると考えられる。

つまり、「順序」とは、事態が生起するまえに、なんらかの要因によって、事態間のあとさきが決められている場合に生じる関係だといえる。

それでは、本来、あとさきの関係が決まっている事態が、その順序で生じなかったり、事態そのものが生じなかった場合は「順序」といってよいのだろうか。(6)では、先行するはずだった事態が起こらずに後行事態のみが起こっている。「～まえに」を用いたcは文脈によっては成立するかもしれないが、「～てから」は前件に否定表現を使うことができないので、bは成立しない。(6)の場合はaの「～ずに」を用いた表現が最も自然である。

(6) a 朝ご飯を食べずに学校へ出かけた。

b\* 朝ご飯を食べないでから学校へ出かけた。

c? 学校へ出かける前に朝ご飯を食べなかった。

(6)では、実際は学校へ着いてからパンなどを食べることもあるので、正確にいうと先行事態が生じなかったというより、本来の順序関係が成立しなかったことを述べている。(6)は後行事態が意図的なものであるが、否定の場合、後行事態が意図的であるか自然発生的であるかによって、使用する表現が異なるようである。次の(7)は後行事態が自然発生的なものであるが、この場合は「～ずに」ではなく、原因・理由を表す「～ので」を使用するのが自然であろう。

(7) a\* 薬を飲まずに咳がでた。

b\* 薬を飲まないでから咳がでた。

c? 咳がでるまえに薬を飲まなかった。

(「どうして咳が出るまえに薬を飲まなかったの」なら可)

d 薬を飲まなかったので咳がでた。

(6) にしろ (7) にしろ、先行事態が生起しなかった場合には、順序の関係は成立していないと考えるのが妥当であろう。

### 3. ～てから

従来、「～てから」には、「以来」の意味を表す用法と「直後」「順序」を表す用法があるとされてきた。この点については多くの先行研究で見解が一致しており、問題はないと思われる。しかし、先行研究の中には、多少疑問に思われる指摘もあるので、以下検討していく。

吉川 1980 は、「以来」の意味が出てくる条件として、

前件：「～から」の形をとる動詞が結果動詞である。

後件：「[時間] がたつ、[時間] になる」という表現、状態表現である<sup>4)</sup>。

という点を挙げているが、(8) は前件が「読む」で動作動詞にもかかわらず、以来の意味として捉えることができることから、前件を結果動詞に限定する必要はないと考える。

(8) その点については、この本を読んでから、ずっと疑問に思っている。

この「以来」の意味が出てくる条件として、岩野 1984 は「後件は、状態や動作・作用が、あるいは動作・作用の結果が持続していることを表していなければならない<sup>5)</sup>と述べているが、これを参考にすると、後行事態が状態または結果の状態として表現されていて、先行事態が後行事態の開始点や開始のきっかけとなっていれば、「以来」の意味が出てくるということになるだろう。

また、吉川は、次の (9) が自然で、(10) が不自然なのは「前後件で関係のある語句が用いられた場合、後件に状態表現を使うことができない<sup>6)</sup>からだとしているが、(11) は前件が後件の原因であり、関係があるにも関わらず、後件に状態表現を使うことができる。

(9) 五月になってから、工事が進んでいる。(吉川例)

(10) 発展計画を実施してから\*文化が進んでいる。(吉川例)

(11) 生水を飲んでから、どうもおなかの調子が悪い。

(10) が不自然なのは、「文化が進んでいる」が現在進行中の状態ではなく、文化がすでに進んだ状態にあること、つまり結果の状態を表しているからであろう。(9) は現在進行している状態を、(11) は現在の状態を表している点で、(10) とは異なっている。

では、(10) の「文化」を、現在進行している状態があり得る「改革」にするとどうであろうか。(12) は、(9) と同様、「進んでいる」が現在進行中の状態になるため、不自然ではなくなる。

(12) 発展計画を実施してから、さまざまな分野で改革が進んでいる。

つまり、後件に状態表現を使うことができないのではなく、結果の状態表現を使うことができないと考える。

次に、岩野 1984 の指摘について述べたい。岩野は「～てから」の用法・意味を次の 3 つにわけている。

時間的な「起点」を表す。

ある事柄（前件）が「契機」となって、ある状態（後件）が始まることを表す。

前件が起きて、その次に後件が起きるという「順序」を表す。

このうち、最後の用法について、「時間的な前後関係よりも順序としての前後関係を示している」<sup>7)</sup>と説明しているが、前述したように、「順序」という言葉だけで説明するのは不十分である。以下の (13) a (14) a は岩野の用例であるが、(13) の場面では、場合によっては、b のように「～まえに」を用いることも可能であるため、(13) a b にどのような違いがあるのかを明らかにする必要がある。

(13) a 手を挙げてから発言してください。(岩野例)

b 発言するまえに手を挙げてください。

(13) では、先行事態、後行事態とも意図的に生起されるのに対し、次の (14) では、先行事態が非意図的に、後行事態が意図的に生起されるという点で異なっている。そのため、後件に話者の意思を表す要素が加わっている (14) a を、「～まえに」を用いて言い替えると、非意図的な事態に話者の意思をつけることになり、(14) b のようにおかしな文になる。

(14) a 鐘が鳴ってから出発しよう。

b\* 出発するまえに鐘が鳴ろう。

b を「鐘が鳴るだろう」としても、a では鐘が鳴ることが前提となっているのに対し、b ではそれが確実に起こるとは言いきれない点で、a b の表現内容が異なってしまう。このように、「～てから」と「～まえに」の言い替えでは前後件が入れ替わるため、後行事態にモダリティ要素がつくと当然言い替えが難しくなる。

「～てから」と「～まえに」の違いについての詳しい考察は、5 で行うことにする。

#### 4. ～まえに

「～まえに」は主に「～ないうちに」や「～までに」との違いから、その用法が考察されてきた。

久野 1973 は、次の a b の違いについて、b では「先生がいつ来るか話し手にわかっているという感じがする」が、a では「先生が間もなく来ることはわかっているが、いつ来るかはわかっていないという感じがする」<sup>8)</sup>と指摘している。

(15) a 先生が来ナイウチニ、遊ビマショウ。(久野例)

b 先生が来ルマエニ、遊ビマショウ。(久野例)

この点については、村松 1994 でも述べたが、「いつ」生じるかははっきりしなくても、生じることが確実であるならば、(16) のように「～まえに」を使うことができると考える。

(16) 秋を迎えるまえにホワイトニングケアをしておきましょう。

(16) では、いつから秋になるのかははっきり決っていないが、秋が来ることは確実なので、「～まえに」を用いることができるのである。

さらに述べると、生起が確実だというのはそう予測できればいいのであって、実際に生起したかどうかまでは関わってこない。次の(17)(18)の後行事態は、もし先行事態が生じなければ確実に生起したであろうが、先行事態の生起によって、実際には未然に終わっている。

(17) 「故障だ！」とあわてるまえにもう一度点検してください。

(18) 手遅れになるまえに手術したので助かった。

(17) は点検することによって「故障だ」とあわてることはなくなる可能性が大きく、その場合、後行事態は実際には未然に終わることになるが、もし点検しなければあわてることになる。つまり、本来の状況下では、後行事態の生起が前提になっており、そのため「～まえに」が使用できるのである。(18) も、手術によって手遅れにならずに助かったので、後行事態は未然に終わっているが、手術をしなければ手遅れになったことを考えると、やはり、後行事態の生起が前提になっているといえる。

では、(19)のように、後行事態の生起が前提となっていない場合はどうかというと、この場合は「～まえに」を使用することはできない。

(19) \*忘レルマエニ返事ヲ書キマショウ。(久野例)

(19) の「忘れる」という事態は、生起する可能性はあるが、確実ではないため、事態の生起を前提としているとは言い難く、そのため不自然だと考える。

次に寺村1992の指摘について考えてみたい。寺村は「～まえに」と「～までに」を比較し、「PマデニQは、話し手が、P点以後の事態に関心をもち、それがQの生起の結果実現する状態であること、その実現がおそくともP点であることを言いたいという、そういう条件の下に生まれる表現であるのに対し、PマエニQは、そのような裏の意味、含みはなく、たんにQということがP点以後にではなく以前に起こったということ言うだけである」<sup>9)</sup>と指摘している。

この説明に基づき、(19) が不自然な理由を考えると、忘れたとしたら、返事を書くことはできないので、QがP点以後に起こることはあり得ないため、わざわざP点以後にではなく以前に起こったという必要がないから、ということになる。(17)(18) と(19) は、後行事態が未然に終わることがあり得るという点では共通しているが、(19) の後行事態はそれ自体生起するか否かが不明であるのに対し、(17)(18) では、先行事態が生じた場合には後行事態が生じない、つまり、後行事態の生起が先行事態の成立不成立によって左右されるという点で異なっている。実際、(19) の「忘れる」を「催促される」に置き換えた(20) は、先行事態の生起により後行事態が未然に終わるので、(17)(18) と同様、不自然ではなくなる。

(20) 催促されるまえに返事を書きましょう。

以上から、「～まえに」の意味・用法を整理すると、「先行事態が後行事態以後ではなく以前に起こる(起こった)ことを言う表現で、後行事態は本来、生起することが前提となっている事態でなければならない」ということになる。

## 5. 順序を表す「～てから」「～まえに」

(21) a 毎日歯を磨いてから寝る。

b 毎日寝るまえに歯を磨く。

(21)は「～てから」「～まえに」とも使用できる場面には差がないであろう。しかし、後件を(22)のようにタ形にすると、a bに違いが現われてくる。

(22) a 歯を磨いてから寝た。

b 寝るまえに歯を磨いた。

「～てから」を用いた場合は、後件がタ形になると必然的に前件の事態も既に生じたことになるが、「～まえに」を用いた場合は、後件がタ形であっても前件の事態はこれから生じる可能性がある。つまり、aでは「歯を磨く」「寝る」とも既に生じた事態であるのに対し、bでは「歯を磨く」は既に生じているが「寝る」は生じていない場合もあり得る。歯は磨いたがまだ寝ていない場合には、bは言えるが、aは使用できないわけである。

では、果して、後件がタ形ではない場合には、「～てから」と「～まえに」には差がないと考えていいのであろうか。

(23) a ほしいかどうか、まず、鈴木さんに聞いてから佐藤さんに聞いて。

b ほしいかどうか、佐藤さんに聞くまえにまず鈴木さんに聞いて。

(23)でもa bで差が感じられる。aの場合は、鈴木さん佐藤さんの両方に聞くことが前提となっているが、bの場合は、鈴木さんにだけ聞いて佐藤さんには聞かずに終わってしまうこともあろう。品物が1つしかない場合などはbの表現を用いるのではなからうか。この(23)と先の(21)の違いは、「～まえに」の前件で述べられる事態、すなわち後行事態の性質によると考えられる。(21)の「寝る」は、日常生活の中で必ず生じることであるのに対し、(23)の「佐藤さんに聞く」はその生起が保証されていない。(21)のように後行事態の実現が何らかの条件で保証されている場合には、「～まえに」は「～てから」とほぼ同じ状況を表すことができると考える。ほぼとしたのは、単文レベルでは言い替えが可能であっても、実際の場面や文脈の中では、他の要素との関わりから差が生じることもあるためである。

次に、「～てから」が使えない場合について述べてみたい。

4で述べたように、「～まえに」は、本来生じるはずだった後行事態が、先行事態の生起によって生じなくなる場合にも使うことができるが、この場合、「～てから」は使用できないようである。

(24) 増税する前に節税しっかり。(中日新聞)

(25)「殺される前に殺そうと思った」と供述している。(日本経済新聞)

これらの例では、後行事態の生起が先に念頭にあり、それを未然に終わらせるために、先行事態を生起させようとしている。「～まえに」を用いた表現は、後行事態が未然に終わる可能性が高いほど、「～てから」に言い替えると不自然になる。つまり、(24)の「増税する」ように先行事態が生じて後行事態が起り得る場合には、「～てから」が使えないことはないが、(25)の「殺される」

のように先行事態の生起により後行事態が起り得なくなる場合には、「～てから」は不自然になる。ただし、(26) では増税を容認する表現になり、(24) とはニュアンスが異なってくる。

(26) せめて節税をしっかりしてから増税してほしい。

(27) \* 殺してから殺される。

このことから、「～てから」は、先行後行の両事態とも実際に生起することが前提となっていないと考えられる。

また、「～まえに」は、先行事態が偶然あるいは自然発生的に起きた場合でも、後行事態の生起が前提となっているのであれば、使用することができる。ただ、このような場合は、事態間にたまたま時間的前後関係が生じたのであって、順序とはいえないであろう。

(28) a (非難所に)いつまで滞在して良いものか。寝る前にそんな考えが頭をよぎった。(日本経済新聞)  
b? そんな考えが頭をよぎってから寝た。

(28) の場合、先行事態が偶発的な「頭をよぎる」ではなく意図的な「考える」であれば、「～てから」を使用しても不自然ではない。

(29) 今後のことを考えてから寝た。

次に、文脈または文中の要素によって「～てから」「～まえに」の選択が制限される場合について考察してみたい。(30) は「～てから」でも「～まえに」でも述べている内容に差がないようであるが、「週に一度」を付けた (31) では、a b の内容に差が認められる。

(30) a 帰宅するまえに電話をかける。

b 電話をかけたから帰宅する。

(31) a 週に一度、帰宅するまえに電話をかける。

b 週に一度、電話をかけたから帰宅する。

(31) a の「週に一度」は「かける」に係るが、b では「かける」または「帰宅する」に係るので、b を後者で理解した場合には、週に一度しか帰宅しないことになる。b のような曖昧さを避けたい場合には、a の「～まえに」が選択されるであろう。

また、(32) のように、文脈から「～まえに」が選択される場合もある。

(32) それではなぜ日本にこうした CTR システムが形成されたのであろうか。それを考える前に、まず日米とも、個人の意識の中にいかに CTR が形成されるかを考えてみよう。(松本青也『日米文化の特質』)  
この場合、前文とのつながりから、「～てから」を使うと不自然になる。ここでは、「それ」が前文の内容を指すので、「それを考える」が前件になる「～まえに」のほうが自然なのであろう。

最後に、「～てから」「～まえに」が共に使えない「順序」について考えてみる。

(42) a? 夏が終わってから秋になった。

b? 秋になるまえに夏が終わった。

(42) では先行後行の両事態とも実際に生起することが前提になっているので、「～てから」「～まえに」が使えるはずであるが、予想に反して a b は共に不自然である。これは、「夏」と「秋」では必然的にあとさきの関係が決まっており、前後が入れ替わることがないためであろう。

しかし、あとさきの順を入れ替えることができないにもかかわらず、「～てから」「～まえに」とも使用できる例もある。次の(43)も、寝てからは歯が磨けないので、あとさきの関係は決まっている。

(43) a 歯を磨いてから寝た。

b 寝るまえに歯を磨いた。

(42) と (43) の違いは、前者が秋になる前には必ず夏が終わるのに対して、後者は歯を磨かなくとも寝ることができるという点にあるのであろう。

## 6. まとめ

順序を表すといっても、「～てから」と「～まえに」では用法上の制約が異なっている。本稿の考察から、「～てから」の後行事態は、確実に生起することが前提になっているのに対し、「～まえに」の後行事態は、実際には未然に終わってしまっても、本来は生起すべき事態であればよいことがわかった。また、後件をタ形にした場合や後行事態の生起する可能性に幅が認められる場合には、「～てから」と「～まえに」では、述べられる内容に違いが生じることも明らかになった。

## 注

- 1) 岩野 (1984), 久野 (1973), 吉川 (1980), 山田 (1981) など
- 2) 新川忠・樋口文彦・比毛博・山内和夫・湯本昭南 (1989)
- 3) 後行という語は辞書には存在しないが、本稿では、先行に対して、後行という表現を用いることにする。
- 4) 吉川 (1980) p. 76  
吉川は結果動詞を以下のように定義している。  
結果動詞とは、「～ている」の形で動作・作用の結果の状態の意味を表すもので、主体の状態が変化するような動作・作用を表す動詞のことである。
- 5) 岩野 (1984) p. 53
- 6) 吉川 (1980) p. 79
- 7) 岩野 (1984) p. 55
- 8) 久野 (1973) p. 93
- 9) 寺村 (1992) p. 137

## 参考文献

- 岩野靖則（1984）「～てから／～たあと」『日本語学』10
- 久野暉（1973）『日本文法研究』大修館書店
- 新川忠・樋口文彦・比毛博・山内和夫・湯本昭南（1989）「なかどめー動詞の第二なかどめのばあいー」『ことばの科学2』むぎ書房
- 寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅰ』くろしお出版
- 村松由起子（1994）「「うちに」「まえに」「あいだに」「までに」について」『雲雀野』第16号
- 山田進（1981）「機能語の意味の比較」『日英比較講座第3巻 意味と語彙』大修館書店
- 吉川武時（1980）「「～てから」をめぐる諸問題」『日本語学校論集』7
- 渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房